

## 資料

## 檜崎勤宛佐多稲子書簡について

## —一九五七年春、女性作家が旧知の元編集者に送った手紙—

加藤 禎 行

一、本稿では、山口県立大学郷土文学資料センターが所蔵する檜崎勤宛佐多稲子書簡三通を紹介する。これらの書簡は、二〇〇六（平成18）年九月七日、御遺族の長女檜崎百合子氏から山口県立大学郷土文学資料センターに寄贈されたものだ。この佐多稲子書簡の寄贈にあたっては、山口県文化振興課西村佳子氏（当時）に、檜崎勤御遺族と郷土文学資料センターとのなかだちとして御尽力を頂いた。そしてまた、書簡の公開にあたっては、中原中也記念館名誉館長の福田百合子氏に、著作権継承者である佐多稲子御遺族の窪川昌平氏を紹介していたが、その御了解を得た。

檜崎勤（一九〇一（明治34）年～一九七八（昭和53）年）は、山口県萩市出身の新興芸術派の作家で、『神聖な裸婦』（一九三〇（昭和5）年四月、新潮社）、『相川マユミといふ女』（一九三〇（昭和5）年一〇月、新潮社）などの創作集を発表しており、そしてまた雑誌『新潮』の編集に携わった編集者としても、文学史にその名を留めている。その文壇回想録『作家の舞台裏 一編集者のみた昭和文壇史』（一九七〇（昭和45）年一月、読売新聞社）は、昭和文学史の一要マを記録した資料としても、しばしば言及される一冊である。

書簡の差出人である佐多稲子（一九〇四（明治37）年～一九九八（平成10）年）は、長崎県長崎市出身のプロレタリア文学派の作家で、『キヤラメル工場から』（一九三〇（昭和5）年四月、戦旗社）、『研究会挿話』（一九三〇（昭和5）年七月、改造社）などで知られる。雑誌『驢馬』（一九二六（大正15）年四月創刊）の同人として知り合った窪川鶴次郎と一九二六（大正15）年七月から結婚生活を送るが、一九四五（昭和20）年五月には離婚している。この窪川鶴次郎との結婚生活を題材とした『くれなゐ』（一九三八（昭和13）年八月、中央公論社）は、昭和戦前期における転向文学の代表的な小説となっている。戦後は『樹影』

（一九七二（昭和47）年八月、講談社）で野間文芸賞を受賞しており、昭和期を代表する女性小説家のひとりである。

佐多稲子「心に残る編集者」（『著者と編集者』第三号、一九七〇（昭和45）年四月）は、「心に残るひと」ということを過去としておもうとすれば、新潮の檜崎勤さんや、中央公論の佐藤観次郎さん、「くれなゐ」という私の作品を連載し、本になるときも世話になった同じ中央公論の清水一継さんと堺誠一郎さんたちである。（中略）檜崎さんはいつも私の貧乏を知っていて、社の会計の時間が切れるとき、私の行く前に稿料を出しておいてくれるという配慮をしてくれる人であった。私は檜崎さんの自宅の方へ原稿を持参して稿料を受けとったりしたのである。」と、『新潮』編集者だった檜崎勤の挿話を挙げながら、その文学回想を書き綴っている。

なお、本稿で採り上げる檜崎勤宛佐多稲子書簡は、一九四一（昭和16）二月二日消印のもの、一九四六（昭和21）年八月十三日消印のもの、一九五七（昭和32）年四月四日消印のもの三通である。すでに刊行されている『佐多稲子全集』全一八巻（一九七七（昭和52）年一月～一九七九（昭和54）年八月、講談社）は、佐多稲子書簡を掲げてはおらず、また『文学者の手紙7 佐多稲子 中野重治 野上弥生子ほか来簡が語る生の足跡』（二〇〇六（平成18）年五月、博文館新社）の刊行に見られるように、佐多稲子の書簡資料については調査研究と情報収集がようやく始められたばかりである。そこで本稿では、この檜崎勤宛佐多稲子書簡の本文と写真版による書簡画像の掲載、そしてその解説を試みることとする。

二、

以下に、書簡本文を掲げながら紹介していく。なお翻刻に際しては、仮名遣

いはそのままとし、旧字体は固有名詞を除いて、新字体に改めた。また写真版を本稿と同時に掲げるので、改行位置については特に明示しないこととした。

【書簡1】 封筒オモテ 東京市牛込区矢来町 新潮社 橋崎勤様

封筒ウラ 二月一日認／長野県諏訪郡蓼科高原 高原ホテル 窪川稲子  
消印 長野・北1622后04

拝啓 今頃こんな手紙を差ししますことは何ともしても申し訳けないことと重々お詫び申上げます 昨日も今日も東京から電報がまわりました 今日もよつぽどお電話かけようかとおもひながらどうしてもそれさへ出来ませんでした 何とかお返事をしなければならぬ〜と思ひながらしりごみをしてしまつて そんな言訳けも申しわけない次第ですけれどもお怒りのこと、おもひます まだ書けつゝけてはをります どうぞ出来上りましてお送り申上げましたとき 受けとつてだけ頂きたうございませ 御都合のよろしい時に出して頂いて結構ですから どうしてこんなにお手数をかけるのかしみ〜口惜んでをります まことに〜幾重にもおわびいたします この手紙差上げますのも気がひけてなりません ほんたうにお許し頂きたうございませ

二月一日認 稲子／橋崎勤様

おそらくは一九四一（昭和16）年一月末日に定められていたと推測される『新潮』三月号の原稿締切に原稿が間に合わないことを詫げる書簡。用箋および封筒ウラには「鳩居堂製」とある。鳩居堂は銀座に東京本店を構える文房具店の老舗。

封筒ウラにある「長野県諏訪郡蓼科高原 高原ホテル」という窪川稲子の居所は、『文学者の手紙7 佐多稲子 中野重治・野上弥生子ほか来簡が語る生の足跡』（二〇〇六（平成18）年五月、博文館新社）に掲載された、書簡番号31（濱本浩宛窪川稲子書簡、一九四一（昭和16）年【推定】二月九日消印）、書簡番号78（窪川健造宛窪川稲子書簡、一九四〇（昭和15）年一月一六日消印）、書簡番号79（窪川健造・達枝宛窪川鶴次郎・稲子書簡、一九四〇（昭和15）年一月二二日消印）にも確認できる。書簡番号79では、「父ちゃんも母ちゃんも

二十五日の晩かへります」と鶴次郎は述べており、一九四一（昭和16）年二月の高原ホテル滞在は、また改めて出向いたものと思われる。高原ホテルはこの時期の窪川鶴次郎・稲子の執筆のための定宿であったか。

『佐多稲子全集』第一八巻（一九七九（昭和54）年六月、講談社）に収められた「年譜」にしたがえば、一九四一（昭和16）年の窪川稲子の創作活動は、一月に「友情」（現代）、「気組」（文芸）を発表しつつ、前年の十二月から引き続いて「四季の車」の新聞連載を『満州日日新聞』紙上で続けるという多忙なものであった。ちなみに『新潮』一九四一（昭和16）年三月号の創作欄に掲載されたのは、室生犀星「伊賀専女」、丸岡明「夜祭」、田畑修一郎「蜥蜴の歌」、伊藤永之介「保健婦」、島木健作「運命の人（第九回）」の五作であった。この書簡以降で、窪川稲子が『新潮』に創作を掲載したのは、一九四三（昭和18）年七月号の「挿話」だけだが、この小説は、インドネシアのスマトラ島にあるメダンの町を舞台としたものだった。だから「どうぞ出来上りましてお送り申上げましたとき受けとつてだけ頂きたうございませ」という窪川稲子の言葉が果たされたのかどうかは、編集者橋崎勤だけが知ることなのだろう。

【書簡2】 封筒オモテ 千葉県東葛飾郡旭村中根六八 橋崎勤様 寿賀子様

封筒ウラ 八月十二日 東京中野区鷺宮二ノ九一八 佐多稲子  
消印 「不鮮明」□□813「不鮮明」

拝啓  
今年はお暑さがはげしうございます 橋崎様お病気とおうはさを新潮社の橋本さんから承りました 橋崎様が新潮社をお退きになりましたことこの前に聞きまして早速お便り申上げたいとおもつてをりますうちにまた御病気のこと聞いたのでございます

長い間のおつかれやこの頃からの御遠路のお通ひのおつかれが出たのではないかとお案じ申上げます お暑い最中お床についておいでであるのではさぞかしと存じ上げます どのような御容態でいらつしやいますか 健造でも近く御見舞いに上らせたいと存じ健造とすること申してをりますすがとりあへずおたづね申上げました この頃アパートの一室が空いてあるとのこと聞いて橋崎様にお知らせ申上げようかなど、そんなことお

もつたりしてをりましたのに新潮社をお退きになつたと聞いておどろきました。御創作に御専念あそばすのかと存じますが御病氣と承り、きつとおつかれがお出になつたことだらうとお察しました。

雑誌からお手を退かれていろく／＼なお考へもおありでせうし私なども何となく淋しく存じますが充分お身体おやすめになつて頂きたくございませう。お近くにをりませんで何のお役にも立たず御厄介をかけたまま、でをりまして心苦しいでございます。私もこの家を追立てられてをりまして気が落つきませんで困ります。焼けた方たちにくらべばまだい、方ですけれどこの節のことでは家のことは大困りでございます。

奥さまと百合子さまはお元気でいらつしやいませうか。うちではおかげさまで身体だけはみんな丈夫でをります。私はちつとも仕事がかどらず何も書けずをりますが自分の仕事をこれからは大事にしたいとそんな気持ちだけは持つてをりました。そちらではどんなものが御不自由でせうか。おつしやつて頂ければ出来るだけのこといたしてみたいと存じます。どうぞ檜崎様くれ／＼も早くお元氣におなり下さるよう祈り上げます。八月十二日 佐多稲子／檜崎勤様／奥様

消印不鮮明のため年についての情報が判然としませんが、檜崎勤の新潮社退社に言及があり、一九四六（昭和21）年の書簡と考えられる。原稿用紙左下の匡郭外には「久楽堂No.10」と印刷されている。久楽堂は、谷崎潤一郎夫人だった千代の兄にあたる小林倉三郎が経営した原稿用紙店の堂号で、多くの作家たちに原稿用紙を販売した。

大村彦次郎『ある文藝編集者の一生』（二〇〇二（平成14）年九月、筑摩書房）によれば、檜崎勤は一九四四（昭和19）年には、この「千葉県東葛飾郡旭村中根六八」に、妻の寿賀子と長女の百合子を伴って疎開している。そして往復三時間の通勤で、新潮社に出社し『新潮』編集を続けていたが、昭和戦前期の『新潮』は一九四五（昭和20）年三月一日発行の三月号をもって発行を停止する。そして三月一〇日のいわゆる東京大空襲で首都東京の被害は甚大であったが、四月一三日の空襲では、新潮社近くの牛込区の赤城神社境内にあった檜崎勤の自宅も焼失した。

佐多稲子は、『新潮』六〇〇号記念号に掲載された「新潮のおもひで」（『新潮』

一九五五（昭和30）年四月）で、この赤城神社の檜崎宅を「その後、赤城神社の境内にあった檜崎さんのお宅へもよく行くようになった。遊びに行ったこともあるが、締切りに遅れた原稿を、夜になって届けに行ったりしたことが多い。それは私の原稿というよりも、窪川鶴次郎さんの原稿だったにちがいない。本やレコードのいっぱいある二階の座敷でコーヒーなどよばれて、そんな間に檜崎さんの奥さんと女同士の親しきになった。檜崎さんの奥さんは私の帰るとき、お嬢さんをちよいと背におぶって、神楽坂の通りまでおくつて下すつたりした。そういうことをおもうと、この頃の私などの感じでは、編集部との関係がずいぶん今とちがっていたようにおもう。もつともそれは、当時でも、新潮は特別だったようにおもう。」と回想している。「奥さまと百合子さまはお元気でいらつしやいませうか」と家族への気遣いが見受けられるのは、こうした檜崎勤と佐多稲子が築いていた関係によるものであろう。

檜崎勤の新潮社退社については、紀田順一郎監修『新潮社一〇〇年図書総目録』（一九九六（平成8）年一月、新潮社）における「昭和二十年」の記述には「この年、檜崎勤が退社したため、後任に齋藤十一が『新潮』の編輯にあたり、編輯顧問に河盛好蔵を迎える。」とあるが、大村彦次郎『ある文藝編集者の一生』（二〇〇二（平成14）年九月、筑摩書房）の調査によれば、一九四六（昭和21）年六月のことである。この六月、日本文学報国会で常任理事を務めた新潮社の中村武羅夫が退社しており、檜崎勤の退社もこれに呼応したものと考えられ、『新潮』および新潮社を刷新していく戦後の機運のなかで起こったことと考えられる。すでに一九四五（昭和20）年一月号で、昭和戦後期の『新潮』復刊第一号は出版されていた。

前掲『新潮社一〇〇年図書総目録』における「昭和二十年」の記述には終戦時在職社員として三二名の社員の氏名が掲げられているが、これによれば「新潮社の橋本さん」とあるのは、のちに桃園書房から発行された雑誌『小説倶楽部』などを編集した橋本晴介のことか。また、「健造でも近く御見舞いに上らせた」と佐多稲子が述べているのは、佐多稲子と窪川鶴次郎との間に生まれた長男で映画監督となった窪川健造（一九三〇（昭和5）年／二〇一五（平成27）年）のこと。窪川健造は、この書簡が書かれた一九四六（昭和21）年、一六歳であった。「私もこの家を追立てられてをりまして気が落つきませんで困ります」とあるが、この時期の佐多稲子が暮らした「中野区鷺宮二ノ九一八」の住居は、

一九四五（昭和20）年四月に壺井栄の世話で転居してきたもので、一九四七（昭和22）年一月には「中野区鷲宮一ノ六〇二」へと、さらに転居している。そして佐多稲子にとつての終戦前後の大きな出来事としては、第一に一九四五（昭和20）年五月に窪川鶴次郎との離婚が成立したことが、そして第二に戦時下の戦地慰問などの行為を批判されて、同年一月に創立された新日本文学会の発起人に加えられなかったことが挙げられる。書簡において佐多稲子は、「私はちつとも仕事がかどらず何もうけずをりませんが自分の仕事をこれからは大事にしたいとそんな気持だけは持つてをりました」と述べているが、一九四六（昭和21）年の佐多稲子は、やがて『私の東京地図』（一九四九（昭和24）年三月、新日本文学会）へと結実することになる連作を、三月『版画』（『人間』）、七月『下町』（『人間』）、十一月『池之端今昔』（『人間』）と着実に積み重ねていた。

一方、新潮社を退社した橋崎勤は、妻寿賀子との結婚の折に媒酌人をつとめた宮崎龍介、白蓮夫妻を仲立ちとして、読売新聞社社長馬場恒吾に求職の希望を伝えており、一九四六（昭和21）年九月、嘱託として読売新聞社に入社の際に正社員となり、読売新聞社の総合雑誌『読売評論』（一九四九（昭和24）年一〇月〜一九五一（昭和26）年六月）の編集長をつとめている。そしてその廃刊後は、読売新聞社の図書編集部長をつとめた。

三、

【書簡3】 封筒オモテ 世田ヶ谷区松原町一ノ六九 橋崎勤様

封筒ウラ 三日 新宿区柏木四ノ九七一 佐多稲子

消印 新宿244後06

ながらく御無沙汰いたしました お障りなく何よりに存じます 奥様もお元気でいらつしやいませうか お嬢さまはもうすつかり御成人でいらつしやいますでせう どうぞお二人によるしくお伝へ下さいまし 「罪つくり」は新潮のおもひ出がはりましたのでお送りいたしました 早速お手紙頂きました あの中に書きましたことにまでお返事頂いておそれいました 別にお返事頂くといふつもりでもございませんでしたけれど お手紙で 大分昔のことをまたおもひ出してをります やつぱりあなたでいらしたのですね どうも見抜かれてゐることが 私をよく

お知りになつてゐる方だとおもつたのですが おそれいます どうもあ、いふ傾向は私の気分の底にひそんでゐるようでそれはなかく変るものでもないようですがその後どうやら無事に過ごしてまゐりました 健造も達枝も結婚いたしました どちらも別に暮らしてをります よく健造がお邪魔をいたしましたことがありましたが いつかも健造とお宅様のおうはさをしたりいたしました 奥様に重ねてよろしくお伝へ下さいまし お身体おいとひ下さいますように

三日 佐多稲子／橋崎勤様

一九五七（昭和32）年一月、現代社から佐多稲子随筆集『罪つくり』が発行された。本書は佐多稲子の手になる序文が付され随筆五〇篇を収めている。この書簡は、随筆集『罪つくり』がかつての『新潮』編集者橋崎勤に献本され、その返礼のために橋崎勤が送った書簡に対して書かれた佐多稲子書簡である。書簡中、「達枝」とあるのは、佐多稲子と窪川鶴次郎の間に生まれた次女で、窪川健造の妹に当たる。そして、このころの橋崎勤は一九五六（昭和31）年、五五歳で読売新聞社を定年退職し、嘱託扱いで読売新聞社の出版局に携わっていた。

まずは、『罪つくり』に収録された佐多稲子「新潮のおもひで」（『新潮』一九五五（昭和30）年四月）を確認しておきたい。一部分は前節で紹介しているため、その箇所を中略とするかたちで以下に掲げる。

新潮に何を書いたのが最初だったろう、と、この頃調べた自分の年譜というものを見たら、昭和五年（一九三〇）二十六歳のとき、「四・一六の朝」を、新潮一月号に発表、と書いてあった。それは「キャラメル工場から」を「プロレタリア芸術」に発表した次の年に当る。その二月に長男が生まれているから、私はこの作品を身重の身体で書いている。「四・一六の朝」は、新潮に発表したときは、「或る一端」という題であった。小林秀雄氏が朝日新聞で批評をした。

雑誌「新潮」は、私には橋崎勤氏と結びついていて、新潮という橋崎さんをおもい出す。何だか橋崎さんひとりしかいらつしやらなかつたみたいである。もうひとつの、「文章倶楽部」だったか、「文学時代」というのに変つていたか、その雑誌に、早く亡くなった佐佐木俊郎さん

がいらつした。新潮社へ原稿を届けにゆき、その原稿料の小切手を、現金の方がいいでしょう、と言って、榎崎さんが自分の印を押して銀行まで給仕さんを走らせて下さるのを待ちながら、あの応接間で榎崎さんと一緒に佐佐木さんにも逢っていた。(中略)／

新潮に、匿名で作家論のつづいたことがある。匿名といっても一頁評論ではなくて、少し長いものだった。そのとき私があつかわれ、私としても納得のゆくものだったが、特に、その中で私のニヒリズムが指摘されており、そのことで私はおやつとおもった。その当時の私は自分のうちにいくらかその傾向のあるニヒリスチックなものを殆ど押えていた。私のこの傾向がどの作品で感じとられたのかそのことはその作家論では、あきらかにしていなかったから、私はどこで自分のその弱点が覗かれたのかを知ることができない。しかしそれが感じとられたということは、自分が隠していただけに複雑に興味があった。

いつになく私は榎崎さんに逢ったとき、その匿名の筆者をたずねた。「あの作家論はいいでしょう」というようなことを言つて私の質問をはぐらかし、榎崎さんはにやにやするだけで、遂に明かさなかった。あなたでしよう、と私は榎崎さんに言い、否定されたけれど、私は今でもその疑いを持っている。今後、榎崎さんに逢ったら、聞いてみようとおもう。もう二十年の余、経つたのだから、榎崎さんも明かしてくれるだろう。そんな昔のことなのに、何となくあの作家論は今でも気になっている。

佐多稲子「新潮のおもひで」(『新潮』一九五五(昭和30)年四月)では、雑誌『新潮』に窪川稲子における「ニヒリズム」「ニヒリスチックなもの」を指摘した匿名評論が掲載され、窪川稲子はその作家論の筆者が榎崎勤ではなかったかと尋ねたが、榎崎勤は否定も肯定もしなかった、という挿話が紹介されている。榎崎勤が佐多稲子に向けて応じた献本の返礼書簡は確認できていないが、本書簡において「やっぱり あなたでいらしたのですね どうも見抜かれてゐたことが 私をよくお知りになつてゐる方だとおもつたのですが おそれいます」とあることから、その筆者が榎崎勤であったことを告白したものと考えられる。

この書簡の示唆にしたがつて、昭和戦前期の雑誌『新潮』に掲載された匿名

批評のうち、窪川稲子と「ニヒリズム」「ニヒリスチック」といった語彙を含む批評を探してみると、以下に掲げる批評文を見出すことができる。掲載されたのは『新潮』一九三九(昭和14)年五月号で、内題では「人物クローズアップ 窪川稲子 原研吉」(目次題は「人物評論 ●窪川稲子 ●原研吉」となっている。「匿名」といっても一頁評論ではなくて、少し長いものだった。)と佐多稲子が回想するように、二名の人物評に四頁が割り当てられている。また「新潮」に、匿名で作家論のつづいたことがある。という示唆にしたがつて前後の『新潮』を確認してみると、一ヶ月前の『新潮』一九三九(昭和14)年四月号に「人物クローズアップ 高見順 渋谷実」(目次題は「人物評論 ●高見順 ●渋谷実」という匿名批評が確認できる。おそらく、こちらが、『新潮』編集者の榎崎勤が雑誌の埋草記事として匿名で執筆したものであったか。

佐多稲子が回想する「人物クローズアップ」の窪川稲子評は、文壇において夫婦で執筆生活をしている宇野千代、北原武夫に触れたのち窪川鶴次郎、窪川稲子に話題を転じ、窪川稲子『くれなゐ』(一九三八(昭和13)年八月、中央公論社)に言及しながら、『くれなゐ』を「生殺しのままの私小説」と評し、「稲子は、もつとも大切なところで、息を抜いたり、重要なポイントで、一本の釘を打つことを怠つてゐる。それが、「くれなゐ」のもの足らなさになつてゐるのである。」と論じている。これを承けて続けられるのが、以下の記述である。

窪川稲子は、小学校もろくに行かなかつたといふことであるが、それにしては、彼女の今日までの血みどろな生活は思ひやられる。そして、彼女が、その過去の生活で、いろいろな職業に就いて、この世の中の汚濁を身につけてゐるであらうのに、彼女にあつてみると、さういふ苦勞をして来たやうな暗さは全然みせない。それも、彼女の持前の性格なのであらうが、それでゐて、彼女自身は案外、ニヒリスチックなものをも、その面貌の裏にちつと押し隠してゐるのではないであらうか。何うにもならないニヒリズムの鬼に憑かれてゐるのではなからうか。さういふ気もする。さういふ時に窪川夫妻の間に、暗渠が作られるのはあるまいか。しかし、大抵の場合、夫婦の間に暗渠が作られるのは、夫の感情に風がひどく吹いてゐる時である。鶴次郎は気持のさつぱりしたい夫のやうにみえるが、あれで、なかなか執念ぶかく食ひさがる情熱をも

つてゐる。年中、身体のコンドイションがわるいわると、愚痴のやうなことをこぼしてゐながら、そのわるい身体のさせる業か何うか知らないが、執念く食ひ下る情熱といふものは、尋常のものではない。その情熱が、彼をして、かつてプロレタリア運動にまで走らせ、また、稲子をも同志とさせたのであらう。さういふ意味から云へば、夫唱婦随である。いや、窪川夫妻の生活はつねに、夫唱婦随である。まことに結構なことである。それでこそ、今日、文筆生活を二人がつづけてゐながら、結びつけられてゐるといふものである。

この「彼女自身は案外、ニヒリスチックなものを、その面貌の裏にちつと押し隠してゐるのではないであらうか。何うにもならないニヒリズムの鬼に憑かれてゐるのではなからうか。」という一節を、一六年後の佐多稲子は強い印象とともに記憶していたことになる。「夫唱婦随」と言いながら、一方で夫婦の間の「暗渠」を指摘する橋崎勤の筆は、のちの窪川鶴次郎、窪川稲子の離婚をかすかに予見していたのかもしれない。

そのうち橋崎勤は、六九歳で文壇回想録『作家の舞台裏 一編集者のみた昭和文壇史』（一九七〇〈昭和45〉年一月、読売新聞社）を刊行したが、『戦時体制下の文学者』の章に「窪川鶴次郎と佐多稲子」という節を設け、佐多稲子の思い出に言及している。その記述は決して長いものではないが、明るさとやさしさを兼ね備えた佐多稲子の第一印象とともに、健造・達枝兄妹を養育しながら作家活動を続けるその強さについて、編集者橋崎勤ははつきりと書き綴っている。その回想を確認して、本稿を閉じることとしたい。

はじめて佐多（窪川）稲子さんに逢ったとき、この人が、当局のきびしい眼をくぐって、プロレタリア運動をしているのかと、わが眼を疑うばかりであった。というのは、「稲子さんのやさしさは近代風であつて日の当つてゐるやうに明るいのが特徴」（室生犀星「黄金の針」）であつたからであつた。あるとき、原稿をとどけに来た稲子さんは、男の子を背負つていた。長男の健造さんであつた。また、あるときは、健造さんの手をひき、達枝さんを背負つていた。東京十二チャンネルで、「佐多稲子——人に歴史あり」のテレビの録画どりのとき、中野重治夫

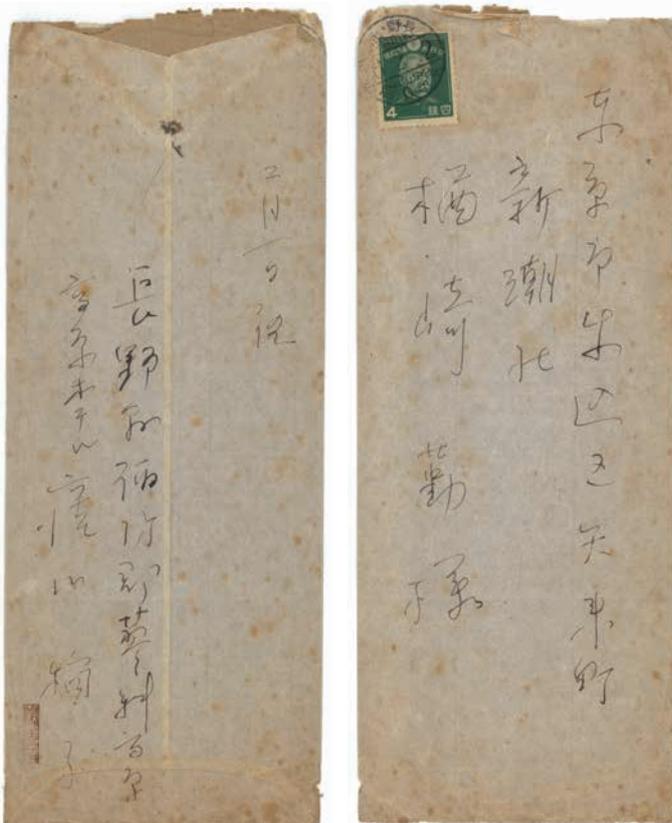
人の原泉さんは、「あのころ稲子さんが二人の子どもをもつたことには驚いた。わたしたちの身辺では、そういう人はいなかったし、考えられもしないことであつた」と、というようなことを語つたが、その言葉はまことに印象的であつた。

附記

本稿は、二〇一九年度の「新潮」編集に関する橋崎勤宛書簡の調査研究」（基盤研究（C））の成果の一部であり、JSPS科研費 JP 18K00283 の助成を受けたものである。

【書簡1】

封筒オモテ 東京市牛込区矢来町 新潮社 橋崎勤様  
封筒ウラ 二月一日記／長野県諏訪郡蓼科高原 高原ホテル 窪川稲子  
消印 長野・北1622后04  
寸法 封筒縦215mm×横83mm 便箋 縦236mm×横162mm





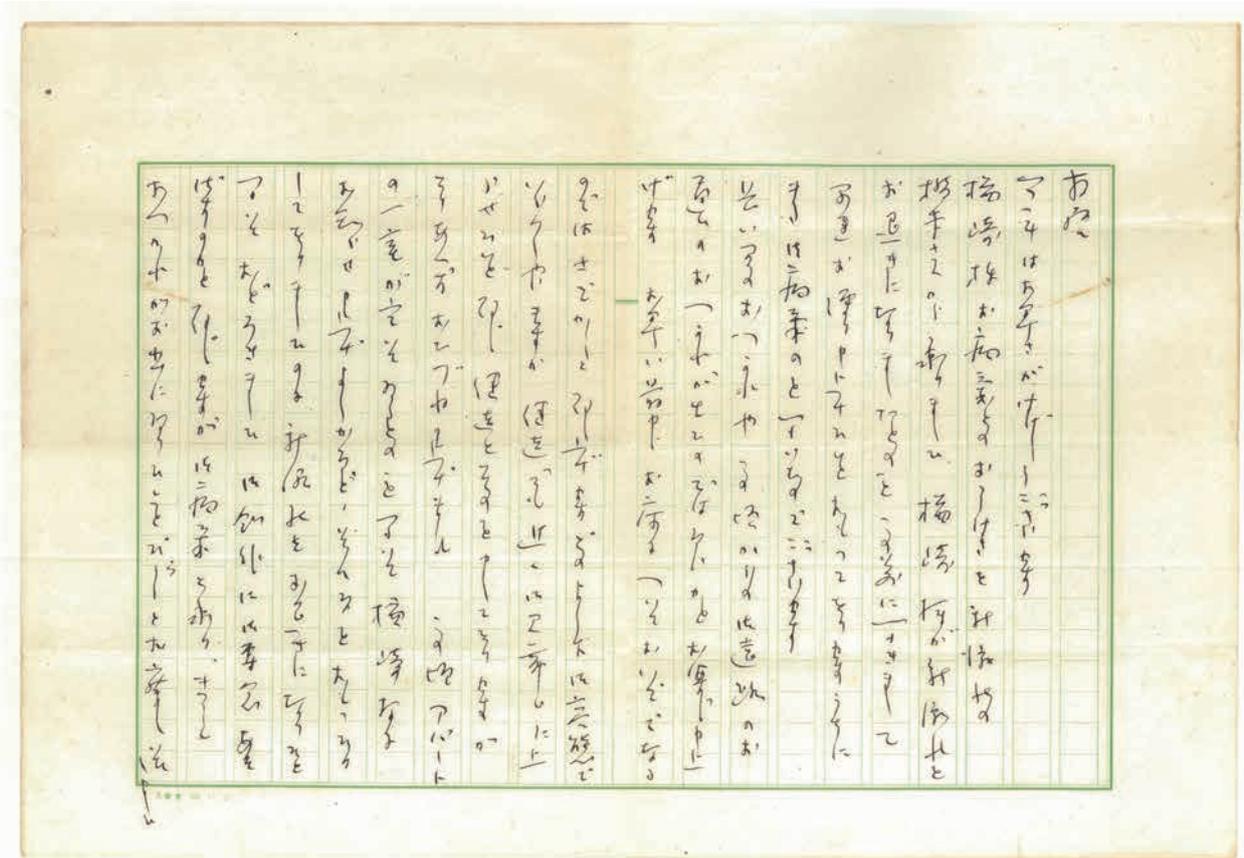
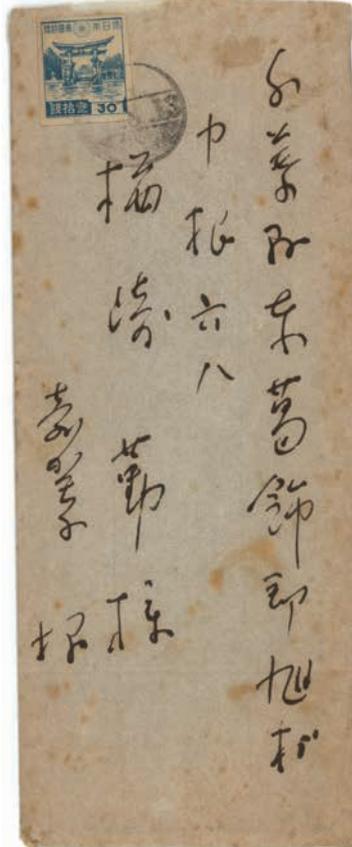
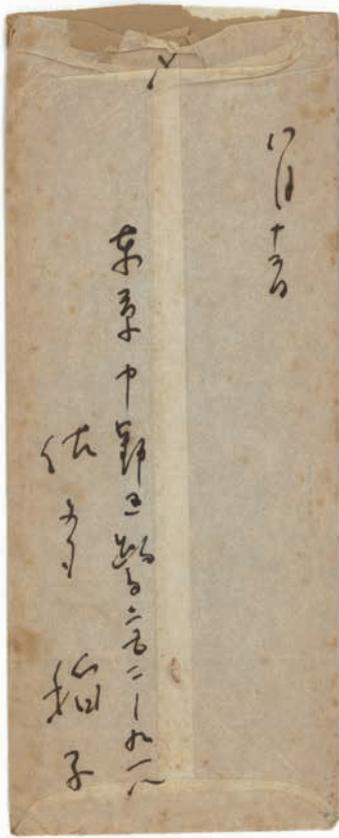
【書簡2】

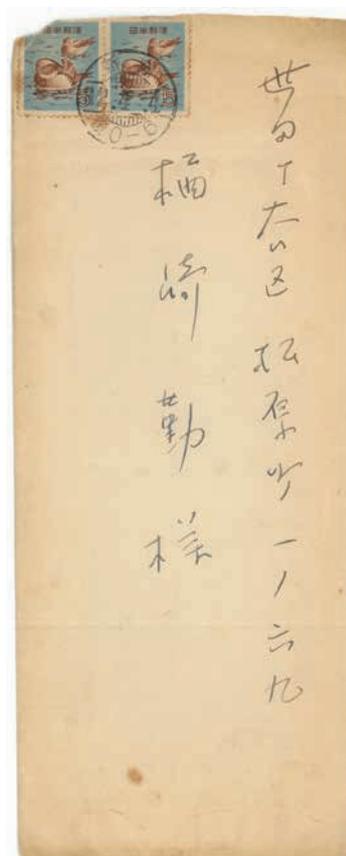
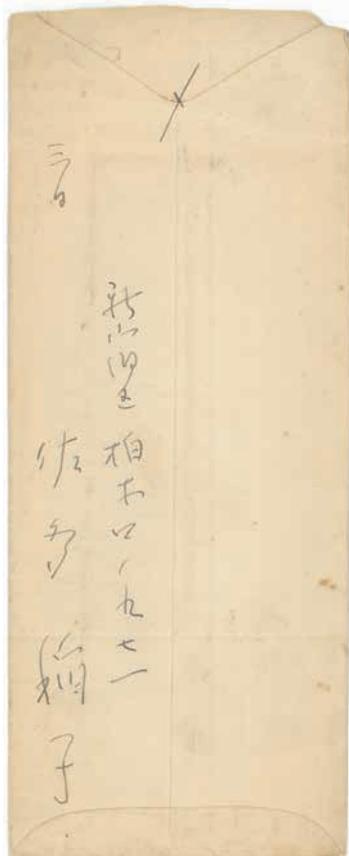
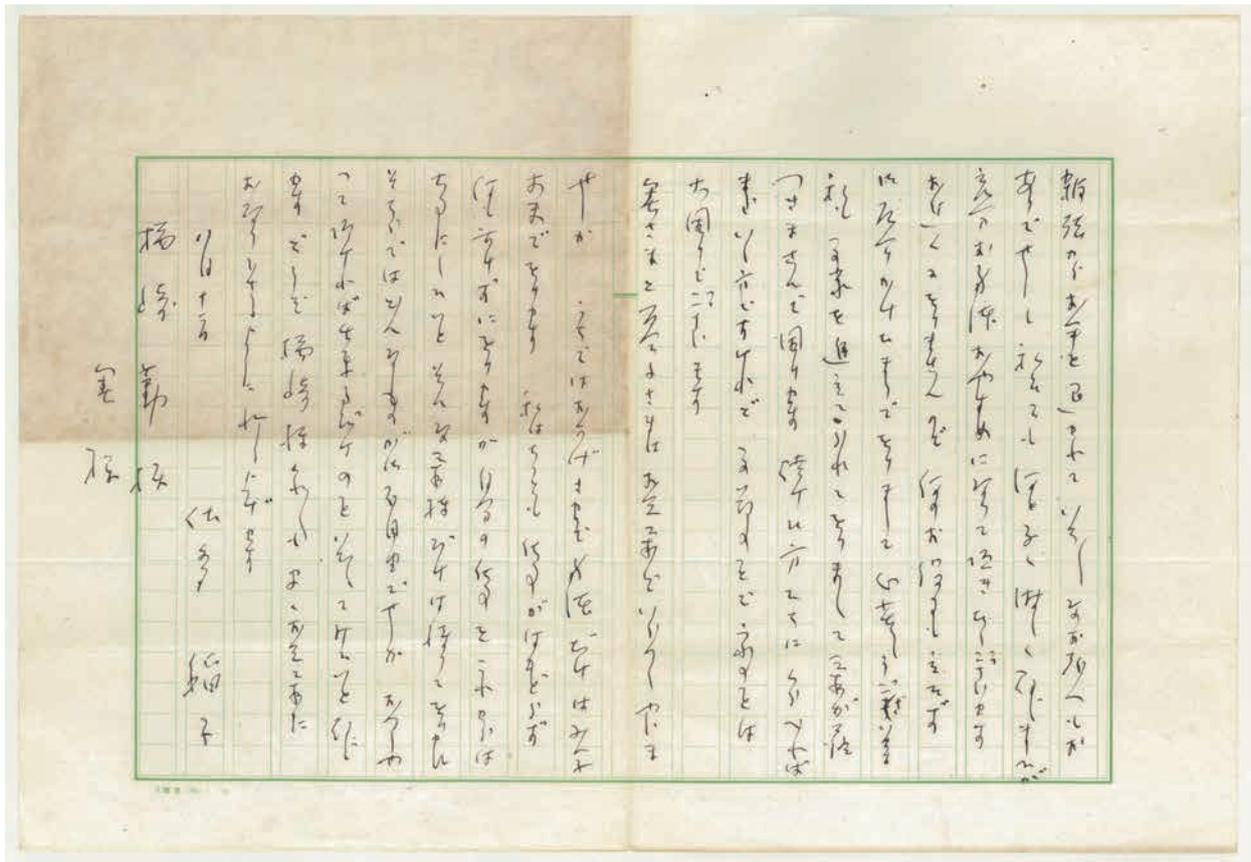
封筒オモテ 千葉県東葛飾郡旭村中根六八 梶崎勤様 寿賀子様

封筒ウラ 八月二日 東京市中野区鷺宮二ノ九一八 佐多稲子

消印 「不鮮明」 □□8.13 「不鮮明」

寸法 封筒縦198mm×横78mm 原稿用紙 縦270mm×横388mm





【書簡3】

封筒オモテ 世田ヶ谷区松原町一ノ六九 檜崎勤様

封筒ウラ 三日 新宿区柏木四ノ九七一 佐多稲子

消印 新宿32.4後06

寸法 封筒縦213mm×横83mm 便箋 縦248mm×横173mm



## **On Sata Ineko's letters to Narasaki Tsutomu** **—sent by a female writer to an old editor in spring 1957**

KATO Yoshiyuki  
modern Japanese literature

This article introduces three letters of Sata Ineko addressed to Narasaki Tsutomu. Narasaki Tsutomu (1901-1978) was an editor of the literary magazine Shincho in 1926-1945, and Sata Ineko (1904-1998) was a female writer known for her masterpiece KURENAI. Through the investigation of these letters, some of the new facts on Sata Ineko's and Narasaki Tsutomu's biographies were made clear.

